

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	生天目 真綾 (なまため まあや)
所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載)	修士課程 1 年
発表年月 または事業開催年月	2025 年 11 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	第 25 回日本認知療法・認知行動療法学会
発表者 (※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	生天目真綾、チャン・ホイシャン
発表題目 (※学会発表の場合のみ記載)	Child Outcomes of Love Withdrawal and Inductive Reasoning as Parental Practices in Singapore
発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)	
<p>本研究では母親のしつけスタイルとして愛情の一時的取り下げ (love withdrawal; 愛情や肯定的関心を取り下げること、以下 LW) と合理的な説明によるしつけ (inductive reasoning; 問題行動がなぜ望ましくないかを論理的に説明すること、以下 IR) に焦点を当て、しつけスタイル間での子どもの自己制御と精神的健康度に差を検討した。IR を行う傾向にある母親の子どもの方が LW を行う傾向にある母親の子どもの方が、自己制御能力および心身の健康度が高いという仮説が検証された。230 組の母子を対象とした質問紙調査を行った。潜在プロフィール分析の結果、母子サンプルは低 LW 高 IR の I 型、高 LW 高 IR の II 型、低 LW 低 IR の III 型の 3 群に分類された。潜在プロフィール分析によって明らかになったしつけスタイルを独立変数、子どもの自己制御能力と心身の健康度を従属変数とした共分散分析を行った。所得を統制し共分散分析を行った結果、しつけスタイルとして合理的な説明を多く用いる群の子どもはあまり用いない群に比べて自己制御能力が有意に高いことが示された。本研究の結果から、論理的根拠に基づく説明を用いたしつけは子どもの自己制御を促進することが示唆された。</p>	

※無断転載禁止